
逆転ラバー

浮夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逆転ラバー

【Nコード】

N7037S

【作者名】

浮夢

【あらすじ】

とある高校の生徒会長と副会長の物語。
可憐な彼と男前な彼女はちよつとした有名人だった。
これは、そんな2人の日常の1コマである。

春もうつらな今日この頃。

麗志は生徒会室の窓から、漆黒のポニーテールを揺らし、疾風の如き速さでこちらへ向かって来るそれを笑顔で見ていた。

―後30秒だな

ここにたどり着く目星をつけると、扉の正面にある椅子に腰を落ち着ける。

……3…2…1…ぜ、バンっ！！

「麗志！！てめえ、これはどういいうつもりだっ！！」

時間通りに勢い良く現れたそれは、この学校の副生徒会長にして、麗志の幼なじみの女の子。

「やあ甜華（てんか）。どういいうって、そのままの意味だよ」

「お前：いくら生徒会長だからって、こんなことまかり通るわけねえだろうがっ！！」

甜華は鼻息荒く会長席前までやって来ると、握っていた紙を机に叩きつけた。

「それがまかり通ったから、こうして掲示板に張り出したんでしょ。特に、女子の皆さんやる気満々みたいだよ。良かったね♪」

「ふざけるな！！なんで本人の了承なしに、こんなこと企てるんだよ！！」

張り紙にかかれた内容は甜華にとって、はつきり言って迷惑以外のなにものでもない。

「別にいいじゃん。デートするくらい。あんなにモテモテなんだから」

「女子にモテてもどうしようもねえだろうが！！なんで私が男装してデートすんのさ！？」

「甜華、会長命令だよ。やれるよね。ていうか、やれ」

にっこり笑った麗志には否を言わせないオーラが出ている。

それを感じとった甜華は、抗議のために開いた口を閉じ何も言えなくなる。

―ぐっ…可愛い過ぎ、この天使の顔した悪魔め。

絶賛職権乱用中の麗志を睨みつけるが、長くは続かなかった。

「私は…ちつ、やっぱり何でもない」

甜華は色んな意味でざわめく心を落ち着けるように、ゆっくりまばたきと深呼吸を繰り返す。

麗志の人の視線をもとめせず小首を傾げるその姿は、非常腹立たしいのに、可愛いという言葉がぴったりである。

―私が（麗志のせいで）可愛いもの好きになっちゃって知らないからって、このやろう

甜華は遂に折れて、盛大にため息をついた。

「ああもう…わかったよ。仰せのままに、東海林（しょうじ）会長様」

呆れて麗志に背を向けているように見えるが、実は麗志の仕草があまりに可愛いので、身悶えている甜華とそれに気づかない麗志。

―むっ…なんだよ。そのよそよそしい呼び方

すっかりボロが出そうで疲れ、そのまま部屋を出て行こうと背を

向けていた甜華は、その時麗志がどんな顔をしていたのか知らない。
そのままドアノブに手を伸ばすと後ろから声がかかる。

「因みに今年は僕も参加するからよろしくね。」

—え！！！—

甜華は、まだ座っているものだとばかり思っていた麗志が真後ろにいて、驚いた。

「びっくりしたー、気配を消して近く止めろよ。ってか、なんで参加する必要あんのさ？」

「えっとねーなんか面白そうだから」

「面白そうって、マジ止める。余計な面倒事を増やすな」

甜華はかなり嫌そうにそう言うと、腰に手を当て笑顔の麗志を見下ろした。

「見下ろすなっば。それに、何かあったら甜華が守ってくれるでしょ？」

—こ…こいつ！！—

無自覚な麗志にうるうるした目で見つめられ、甜華は鼻血が出そうになってしまった。

そこらの女子よりずっと可愛らしく、老若男女問わず思わず愛でたくなる容姿の麗志。

そして、女子から熱い眼差しを一身に受けるくらい男前で美人なのに、大の可愛いもの（麗志）好きな甜華。

それを知らずに、麗志は自分の魅力を甜華にだけフルに使用してくるのである。

只それは、甜華が自分を決して女の子扱いしないので、素の状態

でいられるためではない。

―ああ、可愛い。めちゃくちゃ抱っこしたい。
なでなでして、ギュツとしたい！！

けれど、甜華はそれを実行には移さない。

なぜなら、それは麗志のプライドを傷つけるとともに、この関係が崩壊すると思っているから。

甜華がどうしても守りたいものは麗志だけ。

だから、思わず手が伸びそうになるが、前に組むことによってなんとか自制する。

「…おばさんにも頼まれてるからだぞ。本当に困った時だけだから」

出来るだけ冷静を装い、そう言い放つと甜華は麗志に背を向けた。

「やったー」まあ、そうならないように毎日鍛えているし、全然大丈夫だよ。ほら見て！！」

本当に嬉しそうに弾んだ声で返事が返ってくる。

甜華はバレないかどうかドキドキしていたが、いつも通りの麗志の態度に安心した。

振り向けば、麗志が最近出来てきた力こぶを見せ付けて、どうだといわんばかりに胸をはる。

「…ぷつ、あはは！！当たり前だ。麗志は私が鍛えてるからな。素人に負けたら承知しねえぞ」

あまりに誇らしげな麗志に、甜華はこらえきれず笑い出した。
―うわ…その笑顔反則だろ

だから、今度は麗志が赤くなる番だった。甜華の笑顔に見入っ

て麗志は固まっているが、その張本人は全く気付かずに麗志の肩叩く。

「ほーら、なにボサつとしてんだよ。さっさと帰るぞ」

「ああ…うん、そうだね」

そのままぐるりと回ると甜華はまた歩き出した。

「ちっ…またやられた。僕ばっかした、どんどん惚れてる。覚えてるよ、いつか君を、甜華を手に入れてやるからな」

麗志は心の中で小さく悪態をつくが、胸は温かなもので満たされ幸せを感じていたのである。

その日の帰り道、夕日に伸びる2つの影が出来ていた。

ひとつは女性にしては、高身長でサラサラした漆黒のポニーテールを揺らす男前麗人の影。

もうひとつは、十代の男性にしては華奢で、美少女のように可憐な美人の影。

寄り添い微笑みあう姿は、恋人同士しか見えないのに、まだ付き合っていない麗志と甜華。

この2人が互いの気持ちに気付かないのを、周囲はじれったく感じながらも、応援していた。

ただ容姿だけが、一般的な男女とは真逆2人。

だから、これを見た周囲の人間は2人をこう呼んだ。

『逆転ラバー』

（後書き）

読者の皆様こんにちは。

読了していただき、ありがとうございます。

『逆転ラバー』は、可愛い男の子とカッコいい女の子が書きたいという作者の欲望から生まれました（笑）

勢いだけで書いた拙作なのですが、楽しんでもらえたなら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7037s/>

逆転ラバー

2011年5月8日10時05分発行